



Data 2022-110

監督・脚本: ナンニ・モレッティ
 原作: エシュコル・ネヴォ『三階 あの日テルアビブのアパートで起きたこと』五月書房新社
 出演: マルゲリータ・ブイ/リッカルド・スカマルチョ/アルバ・ロルヴァケル/アドリアーノ・ジャンニーニ/エレナ・リエッティ/アレクサンドロ・スペルドゥーティ/デニーズ・タントウッチ/ナンニ・モレッティ

👁️👁️ みどころ

本作の舞台は3つの家族が1F、2F、3Fを所有する共同住宅。そのため、タイトルは『3つの鍵』だが、冒頭、いきなり車がその1Fに突っ込んできたから大変。そこから少しずつ明らかになる3つの家族の素顔とは・・・？

原作『三階 あの日テルアビブのアパートで起きたこと』をイタリアの巨匠ナンニ・モレッティ監督が跡形なきまでに変更して描いた家族模様は、こんな事件、あんな事件が次々と続く中、人間の本性があぶり出されていくので、それに注目！

さらに本作は、「その5年後」と「その10年後」も……。コロナ禍が続く中、世界はますます閉じ込められていくの？いやいや、本作を観れば必ずしもそうではないだろう。そんな希望も少しは……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■イタリアの巨匠ナンニ・モレッティに注目！作風は？■□■

私が『シネマ1』をはじめて出版したのは2002年6月。その中に1本イタリアの巨匠ナンニ・モレッティ監督の『息子の部屋』がある(57頁)。その「みどころ」に、私は「パルムドール賞受賞作品。大切な息子の死を巡って、さまざまな人間模様が……。しかし、重くしんどい。」と書いた。本文中の「小見出し」も、「暗い、しんどい、疲れる……」だし、評論のラストは「考えさせられる映画ではあるが、もう一度観てみようという気になる作品ではない。パルムドール賞の出来としては、断然、昨年の「ダンサー・イン・ザ・ダーク」の方が上だ。」だから、かなり手厳しい。

私を含めて日本人の多くはナンニ・モレッティのことをよく知らないが、彼はカンヌ国際映画祭の常連である上、ベネチア、ベルリンの映画祭をも制しているイタリアの巨匠だ。本作のパンフレットには、ティエリー・フレモーの「ナンニ・モレッティについて」と、

小柳帝（ライター・編集者）の『『3つの鍵』に見るモレッティの作家性』があるので、「ナンニ・モレッティ監督からのメッセージ」と「ナンニ・モレッティ監督へのインタビュー」に合わせてこの2つを読めば、彼の作風がよくわかる。

それらを読むと、彼は映画監督だけでなく、プロデューサー、配給者、作家、政治家、スポーツマンでもあるそうだが、さらに脚本家、俳優、映画館の経営者であることもわかる。そんな彼が、「配信サービスに自分の映画を“捨てる”気は全くない。」と語っているのも興味深い。本作については、そんなナンニ・モレッティ監督に注目！

■□■タイトルの意味は？なるほど、なるほど…■□■

本作は、同じ建物に住む3つの家族の物語。1Fにはルーチョ（リッカルド・スカマルチョ）と弁護士の妻サーラ（エレナ・リエッティ）が、愛娘のフランチェスカ（キアラ・アバル）と共に居住。2Fは夫が長期出張中で陣痛が始まったばかりのモニカ（アルバ・ロルヴァケル）が居住。そして、3Fに住むのは、裁判官夫婦であるヴィットリオ（ナンニ・モレッティ）とドーラ（マルゲリータ・ブイ）、そして息子のアンドレア（アレッサンドロ・スペルドゥティ）だ。

都市問題をライフワークにしてきた私は、数名が共同で建物を建てるプロジェクトに関与したことがあるが、それには一長一短がある。もっとも、本作では3つの家族がどんな経緯でワンフロアずつ所有する共同建物に住んでいるのかは説明されず、単に『3つの鍵』とタイトルされるだけだ。しかし、後半には3Fを売りに出すシークエンスの中で、その間取り等も明確にされるので、興味のある人はそこにも注目！

ナンニ・モレッティ監督のメッセージによれば、本作は「罪悪感、選択の結果、正義、親としての責任など、普遍的なテーマを扱っている」そうだが、彼の映画の登場人物は、裁判官、弁護士、建築家等のそれなりの地位と財力を持った人物が多いらしい。日本では裁判官には官舎が与えられるから、3Fに裁判官夫婦が住んでいるという設定は考えづらいが、それはともかく、共同建物に住む“3つの家族”を描く映画だから、タイトルは『3つの鍵』。なるほど、なるほど……。

■□■サスペンス風の導入部だが、その実態は交通事故！■□■

今ドキの邦画は、何でも説明調のわかりやすいものが多いが、フランス、イタリア等の映画は説明を避けて、ひねっているものが多いから、分かりにくいものも多い。本作冒頭は、一人の女性が立たずむサスペンス風の導入部だが、そこでは続いて、その女性を轢いた車がそのまま建物の中に突っ込むシークエンスが描かれる。これは、今ドキ日本で多発している高齢ドライバーによるアクセルとブレーキの踏み間違い……？いやいや、そうではなく、停まった車の運転席には若者の姿が！飲酒運転の上で女性を撥ね、さらに建物の1Fに突っ込んできたこの若者は、何と3Fに住む裁判官夫婦の息子アンドレアだった。ここから、“3つの鍵”の物語がスタートする。飲酒運転の問題点を問う映画ならば、これからアンドレアの刑事裁判の進め方が詳しく描かれるはずだが、タイトルからしてもナン

ニ・モレッティ監督の作風からして、そうではないはずだ。

2Fのモニカはこの交通事故に直接の関係はないが、1Fはひどい被害を受けたから大変。被害直後の混乱の中、ルーチョとサーラ夫婦は仕方なくフランチェスカを向かいの家に住む老夫婦に預けたが、そんな安易なことをしているの？他方、3Fの裁判官夫婦は、我が息子の犯した罪をしっかりと受け止める決意を固めているようだが、肝心のバカ息子は・・・？

さあ、冒頭に見たこんな交通事故（暴走、死亡事故）は、“3つの鍵”をキーワードとする“3つの家族”の人間模様にかかる影響を・・・？それこそが本作のテーマだ。

■□■こんな事件、あんな事件が、次々と■□■

『ハンナ・アーレント』（12年）を観ると、「アイヒマン裁判」を傍聴したハンナ・アーレントが書いた傍聴記の結論が、「悪の陳腐さ（凡庸さ）」であったことの意味がよくわかる（『シネマ32』215頁）。つまり、ユダヤ人の大量虐殺を、平然と実行するという特異な事件は、必ずしも特異な人間の特異な犯罪ではなく、凡庸な人間がいくらでも残忍で非人間的な行為ができるということだ。私が、ここでなぜそんなことを書くのかというと、愛娘のフランチェスカを、向かいの老夫婦に預けたことによって、“ある事件”が起きるためだ。一見人の好い、あの認知症（気味）の老人が、幼い娘によからぬ性的いたづらを・・・？弁護士をしている母親のサーラは警察の事情聴取に納得したが、父親のルーチョの方は、「このじいさんはきっと・・・。」と、とことん疑いの目を向けていくことに。

そんな事件に続いて、本作中盤には、パリから祖父母家に戻ってきた孫娘のシャルロット（デニーズ・タントウッチ）とルーチョとの間に“あつと驚く事件”が起り、これが強姦の刑事裁判にまで発展していくから、アレレ・・・。もともと本作では、観客はスクリーン上で“コトの真相”を見せられているので、強姦の刑事事件がどう展開していくのかを興味深く見守るだけだが、そのストーリー展開は如何に？

本作で目立つのはアンドレアのバカさ加減だが、実はこれは両親ともに裁判官という（恵まれた）家庭に生まれたアンドレアの宿命？とりわけ、父親の一人息子に対する期待と厳しさは、かなりのものだったから、本作に見るこの“父子断絶”のサマは、凄！すると、この3人家族をめぐるさらなる事件は如何に・・・？さらに、本作前半は長期不在の夫との間で少し精神的に問題がある程度だった2Fのモニカも、夫ジョルジョ（アドリアーノ・ジャンニーニ）とその兄ロベルト（ステファノ・ディオニジ）との確執の中、指名手配されたロベルトが、突然モニカの元を訪れるというハプニング（事件）が発生するので、それにも注目。

このように本作では、こんな事件、あんな事件が次々と起り、多くの登場人物が様々な人間性を顕わにしていくので、それに注目！

■□■「それから5年後」は？「それから10年後」は？■□■

冒頭の飲酒運転による女性のはね飛ばしと、建物への突入事故もひどいが、本作中盤の、

ルーチョによる向かいの老夫婦の孫シャルロットに対する強姦事件(?)もひどい。しかし、コロナのパンデミックから早や2年、ロシアのウクライナ侵攻からは早や7カ月、だから時間が経つのは早い。しかして、スクリーン上に登場する、「それから5年後の姿」にも注目。

ここではまず、3Fの父子の確執は、息子による父親への暴力沙汰に至っているからアレ・・・。そんな中、妻のドーラは夫から、「自分を選ぶ?それとも息子を選ぶ?」と大変な選択を迫られたから大変だ。交通事故について息子アンドレアが実刑判決を免れないことは、裁判官である両親には分かり切っていたからその点はハッキリしていたが、肝心の息子の方は・・・?バカ息子の情けない姿にはげんなりだが、それでも母子は母子、父親が息子を見限っても、母親にはそれができないらしい。すると、「それから5年後」の母ドーラと息子アンドレアの関係は如何に?

5年後、大きな変化に見舞われているのは2Fのモニカも同じ。本作前半は、夫ジョルジョとその兄ロベルトとの、とてつもない確執の深さが描かれていたが、前半で事業の成功を誇り、我が世の春を謳歌していたロベルトが、それから5年後には"イカサマ商法"が崩壊し、指名手配されるニュースが流れているから、アレレ・・・。しかも、そんな中のある日、ロベルトがモニカの前に登場し、夫が長期出張しているのを幸いに(?)、匿ってくれと頼み始めたからやばい。こりゃ一体どんな展開に?そう思いながら観ていると、モニカとロベルトの動きは、更にアレレ・・・アレレ・・・。他方、シャルロットに対するルーチョの強姦事件の判決は、有罪に?それとも無罪に?それはあなたの目でしっかり確認してもらいたいが、なるほど、なるほど・・・。

もっとも、それで終わりと思っただけはダメ。本作ではさらにそれから5年後も描かれるのでそれにも注目!

■□■原作は跡形もなし! ?この巨匠ならそれもあり! ■□■

『3つの鍵』と題された本作の舞台はローマにある3家族が住む共同建物。価格は分らないが、相当の高級住宅だ。しかし、本作の原作になったエシュコル・ネヴォ氏の『三階 あの日テルアビブのアパートで起きたこと』の舞台は、タイトル通り、イスラエルのテルアビブにあるアパートだ。したがって、当然その価格も本作とは違うし、住んでいる人の社会的地位も収入も全然違うはずだ。パンフレットにあるエシュコル・ネヴォ氏の「誰も無関係ではいられないだろう」では、原作者は完成した映画を2度観たそうだ。その1度目は、「映画の中に私の本の痕跡を探すのが精一杯だった。」らしい。しかし、2度目に観たときは、「もっと自由に感情の動きに身を任せることができた。」らしい。

それが可能になったのはエシュコル・ネヴォ氏が、映画化を承諾する際に自分が関与しないことだけを条件としたためだが、ナンニ・モレッティ監督は何故、そんな原作を跡形もないほど変えてしまったの?それは本作パンフレットを読めばよくわかるが、要するに、ナンニ・モレッティ監督にとっては「3つの鍵」、「3つの家族」というテーマが重要で、

舞台はパリでもローマでも、どこでもよかったらしい。なるほど、なるほど。

もちろん、私は原作を読んでいないが、「3つの鍵」、「3つの家族」の物語というだけで、登場人物が多くなるのは必然。したがって、本作を鑑賞するについては、1F、2F、3Fそれぞれの住人の顔と名前を一致させながら観なければならぬからそれなりにしんどい。そのうえ導入部から"向かいの老夫婦"という大問題発生の張本人も登場する上、中盤からその孫娘シャルロットが登場し、ルーチョに対して、いかにも怪し気な行動をとるので、いつ何が起るのかとスクリーン上から目を離すことができなくなる。

『3つの鍵』というタイトル、そして2時間という枠のなかで、これほどさまざまな人間模様と事件を入れ込んだのはナンニ・モレッティ監督の手腕だが、これでは原作は跡形もなくなっているはずだ。原作者の想いはともかく、ナンニ・モレッティ監督ほどの巨匠ならそれもあり！多くの登場人物が織りなす、複雑な人間模様をしっかり楽しみ、かつ考えたい。

2022（令和4）年 10月 3日記